

Title	ヘーゲル人倫思想の研究
Author(s)	霜田, 求
Citation	大阪大学, 1994, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.11501/3078938
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	しも だ もとむ 田 求
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学位記番号	第 1 1 4 7 0 号
学位授与年月日	平成 6 年 6 月 9 日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科 哲学哲学史専攻
学位論文名	ヘーゲル人倫思想の研究
論文審査委員	(主査) 教授 塚寄 智 (副査) 教授 里見 軍之 助教授 鷲田 清一

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、ヘーゲルの哲学体系における「客観的精神」、とりわけその中心概念である「人倫性 (Sittlichkeit)」に関する諸問題の研究を課題とする。「精神 (Geist)」というヘーゲル哲学の体系構成原理は、社会・歴史という境位のうちに客観的現実性を得ており、その哲学的探究のなかに、ヘーゲル独自の倫理的立場 (= 人倫思想) が認められる。従来この分野の研究は、カント倫理学との対比や社会思想史的な位置づけなど、その一部を取り上げて議論するのが一般的であった。本論文では、人倫性概念を中心とした統一的視座に基づく体系的研究を通して、ヘーゲルの人倫思想が現代においてもなお批判的思想としてその有効性を主張しうる倫理学説であることの論証を試みる。

序論 理性と総体性－ヘーゲル人倫思想の批判的考察

はじめに、本論文全体を貫く主要テーマと解釈の基本的視座を概括する。

ヘーゲルは、＜近代＞の歴史的・体系的な必然性を承認しつつ、同時にそれが「悟性」という主観的・形式的な原理を固定化するものであることを厳しく批判し、これに対抗する「理性」の立場を打ち出す。そして理性の客観性を「総体性 (Totalität)」としての人倫性のうちに定位し、これを、倫理的な価値・理念・規範の現実的な基盤である社会的共同性として構想する。そこでは、主体的意志の自己規定 (= 自律) を中心に据える「道徳性 (Moralität)」とこれを原理とする近代市民社会とが、何れも特殊と普遍の悟性的関係にとどまるものとして、＜具体的普遍＞である人倫国家に批判的に＜止揚 (Aufheben)＞される。この＜止揚＞のメカニズムを解明することにより、歴史的・社会的な媒介概念と理性の自己反省能力という、ヘーゲル人倫思想に内在する批判的洞察の骨格が得られる。

I 道徳性から人倫性へ

第1章 道徳性における自由・意志・行為・善の問題－『法哲学』における道徳性批判 (1)

ここでは、人倫性概念の成立過程において道徳性への批判が果たす役割を確認しながら、ヘーゲル人倫思想の根本モチーフを明らかにする。体系期の客観的精神論を展開した『法哲学』(1821)では、「抽象的な法ないし権利」における形式的な人格から、自己自身を規定する道徳的主体への「意志」の自己形成過程が論じられる。道徳的な意志は、

「主體的意志」(カント倫理学の立場)や「形式的良心」(ロマン主義の立場)として、自由と善の実現を目指す。しかしその抽象的主観性は、現に存在し妥当している共同体の倫理や規範から分離された特殊性という形式にとどまり、自由と善は具体化されることがない。

第2章 具体的普遍としての人倫性—『法哲学』における道徳性批判(2)

道徳性に見られた特殊と普遍の二元対立が、人倫性において具体的に統一される。ヘーゲル人倫思想の骨格を、この〈具体的普遍〉の概念を用いて明確にした上で、その意義と限界を探るのが、ここでの課題である。「人倫的心術」=「真の良心」と「生ける善」の理念とが、それぞれ主客両側面における〈具体的普遍〉を実現するものとされる。しかし、諸個人をたんなる〈契機=偶有性〉として自らの对象的現実化のうちに統合する実体には、諸個人の抽象的な個性が対置されたままである。この点で、ヘーゲルの人倫性による道徳性批判は不徹底なものであると言わざるを得ない。

第3章 良心の相互承認—『精神現象学』における道徳性批判

『精神現象学』(1807)でも既に道徳性批判はヘーゲルにとって重要な位置を占めていたが、そこでの問題は、個別的な「自己意識」がいかにして精神的共同性—〈我々である我=我である我々〉—を創出するに到るかという点にあった。「良心」という主観主義的な自己確信の主体が行なう「相互承認」の運動は、現実的な社会的共同性を具体化するものとは言えないが、そこで示される〈哲学的自己認識〉による宗教批判には、相互主体性による道徳性批判の可能性を内包するものとして、独自の意義が認められる。

II 人倫性の原理と構造

第4章 倫理的義務論と人倫的主体性

人倫性は理念としての善および自由を具体化するものであると同時に、実体性として義務の規範的拘束力の根拠をなす。従って、ヘーゲルが「道徳的義務論」に替えて提示する「倫理的義務論」は、人倫性の基本原理として理解することができる。その中心に据えられる人倫的主体性(「人倫的心術」=「真の良心」)は、実体的な「徳」と近代道徳の自己意識的反省知を、共に自己の契機とするものである。

第5章 市民社会の倫理性

近代市民社会は、自己の私的利益を追求する「特殊的人格」と普遍性を形づくる制度・組織・機構—「欲求の体系」・「司法活動」・「福祉行政」・「職業団体」—とから成るものとされる。ここでは、特殊と普遍の悟性的統一という市民社会の構造を解明した上で、そのなかで問題となる倫理性を、近代的な「諸身分の体系」(=職業階層)と「心術」(「誠直」・「身分上の誇り」)との関係に定位しながら検討を加える。

第6章 人倫国家と主体性

ヘーゲルは自ら構想する人倫国家を理性的であると主張し、その根拠を様々な議論のなかで提示している。ここではそれを以下の二点にまとめ、その妥当性を検証する。一つは、〈国家による市民社会の止揚〉、即ち近代市民社会の〈悟性性(Verständigkeit)〉を有機的総体性としての国家のうちで克服する、という構図である。そこには、特殊的人格が徹底して自立的になることが、それを実体的統一へと連れ戻す近代国家の〈強さと深さ〉を可能にするという、イデアリスムの原理が働いていること、そしてそれがヘーゲル独自の〈理性〉概念を形づくるものであることを確認する。もう一つは、国家がそれ自身〈主体〉として自己運動を行なうものだという論理である。この運動は、経済的自由主義の自立的展開(=分枝化)と危急事態に排他的なく個性性として行なう統合の強化(=収斂)とから成る。そして、「議会」・「世論」といった媒介原理や、諸個人の主観的心術(「愛国心」・「信頼」・「勇気」)、「君主」の最終的意志決定などが、国家の有機的総体性を支えるものとしてこの運動に参加する。この点を理解する鍵となるのが、〈概念の論理的必然性〉というヘーゲル固有の方法原理であることを確認する。

III 客観的精神としての人倫性

第7章 人倫性と歴史

本章では、ヘーゲルの歴史哲学が近代国家の確立をもって客観的精神を完結させるものであるという前提を踏まえ、以下、以下の二つの課題を設定し、その考察を試みる。第一に、〈自由と理性〉を現実化する近代の人倫国家は、「世界精神」の歩み（＝歴史）の「究極目的」として世界史的正当性が与えられ、そのことが「理性が世界を支配する」という根本テーゼの内実をなすものであることを示す。第二に、それ自身〈主体〉である人倫国家も、「世界精神」という歴史の〈主体〉の観念的契機であり（〈歴史のイデアリスムス〉）、さらにより包括的な主体性概念の担い手である「理念」＝「普遍的精神」による体系的正当化、或いは〈神＝絶対者〉による歴史の正当化（＝「弁神論」）によって根拠づけられていることを明らかにする。

第8章 人倫性と宗教

「絶対的精神」を構成する宗教と哲学は、客観的精神としての人倫性の〈理性性（Vernünftigkeit）〉と深く関係している。とりわけ宗教の位置づけは、ヘーゲルの思想的発展のなかで変化が見られ、そのことが人倫性概念の理解にとっても重要なポイントになる。ここでは、宗教が主観的心術という形で国家の理性性を（内面的統合原理として）支えるという段階から、「プロテスタンティズム」が国家の「基底」としてその理性的状態を可能にする条件とされ、しかもそこで成立する国家（理性）と宗教（信仰）の「和解」が精神の体系的展開（絶対者の自己実現）により正当化される、という段階へ到るプロセスを検討する。

IV 人倫性の批判的継承—ヘーゲル人倫論批判の現代的意義

社会における個と全体、特殊と普遍、主体と客体、自由と規範といった問題連関を、その根源にさかのぼって探究しようとする者にとって、ヘーゲルの人倫思想は、そこから多くの示唆を得ることのできる源泉であり続けてきた。その主要な解釈の試みを批判的継承の系譜として再構成し、ヘーゲル人倫論批判の現代的意義を探るのが、以下の課題である。

第9章 宗教批判から政治批判へ—ヘーゲル左派とマルクス

先ず、ヘーゲルの死後、その影響力を行使していた壮大な哲学体系に対して、宗教哲学批判を突破口にその解体作業に着手した「ヘーゲル左派」と呼ばれる一群の思想家たちの解釈を取り上げる。ここでは、宗教哲学の〈無神論〉への還元、国家と宗教の相互補完的構造への批判、そして〈国家による市民社会の止揚〉への批判といった問題を論じる。

第10章 人倫性における個と全体—自由主義と実証主義

次に、近代市民社会および国家における個と全体の関係を、個人の自由・権利や全体の支配をめぐる問題として捉え、そのなかにヘーゲルの人倫論を位置づける試みを検討する。一方で、ヘーゲルの市民社会論に見られる自由主義的要素を評価する〈リベラリズムの擁護者〉という解釈があり、他方では、全体の個に対する絶対的優位を主張するヘーゲル哲学を〈支配のイデオロギー〉として非難する立場がある。これらの解釈を批判的に検討する作業を通して、個と全体の二元対立の固定化を超出する視角（＝批判的媒介思想）を浮かび上がらせる。

第11章 批判的総体性としての人倫性—批判理論

ヘーゲルの歴史・社会理論を批判的に継承するという姿勢を明確に打ち出し、その理論的実践をヘーゲルの〈批判的—弁証法的な総体性〉概念に依拠して遂行するのが、「批判理論」である。ここでは、ホルクハイマーおよびアドルノによるヘーゲル哲学の批判的解釈が、〈総体性〉概念を〈否定性〉と〈媒介〉に貫かれた批判的カテゴリーとして捉え返すものであることを確認する。

第12章 実践哲学の原理としての人倫性

現代のヘーゲル人倫思想の解釈においてとりわけ注目すべきなのは、人倫性を「相互主体性」として捉え、これを実践哲学の原理に据えるという試みである。しかしそうした試みも、〈実体＝主体〉としての普遍者の自己実現や有機的総体性といったヘーゲルの体系原理への内在的批判が欠落している限り、十分な成果を生み出すことはできない。人倫性を実践哲学の原理として導入しようとする場合、その試みは、この概念に具わる〈理性の客観性〉という理念を批判的総体性として捉える視角（＝批判的理性の自己反省）を伴ったものでなければならない。ヘーゲルの人倫思

想は、こうした批判的洞察を踏まえることによつてのみ、その意義ある継承が可能となるのである。

論文審査の結果の要旨

論者が、本論文のなかで試みているヘーゲルの読解方法は、ヘーゲルの人倫思想の内部で、近代的な主体性原理の現実態であるとされる道徳性と市民社会とを批判し、それを人倫国家へと止揚していく過程で働く〈総体性〉という概念の「批判的機能」を析出すると同時に、その同じ批判的機能を折り返してヘーゲルの思想体系それ自身へも向けるという、いわば二重化された「弁証法的」な読解である。言い換えると、それはヘーゲルの思想の内在的批判の試みでもある。

この「批判性」は、ヘーゲルにおいて、個と全体、特殊と普遍、主観と客観といった二元的な対立を固定化する（ヘーゲルのいう）悟性的な抽象的思考を乗り越える試みとして働くことから始まり、さらにそうした対立の各項の自存的実体化を突き崩す「否定性」ならびに「媒介」の論理へと練り上げられていった。論者の読解は、そのヘーゲルの思想の批判性を、ヘーゲルを超えて、現代の基礎的な社会理論として、批判的に継承・展開する可能性を探ろうとするものである。

IからIIIまでは、ヘーゲルの人倫思想の展開のなかで、この〈否定性〉と〈媒介〉の論理のもつ「批判性」が議論の各ポイントでどのように機能しているかが論じられる。本文では『精神現象学』と『法哲学』での議論を対象に分析が進められ、「注」で『歴史哲学講義』や『人倫の体系』など他の重要著作での議論との呼応がそのつど検証される。

その分析の成果を踏まえた上で、次にヘーゲル以後のヘーゲル批判のいくつかの類型が逐一検討され、その作業を通じて、ヘーゲルのいわゆる「批判的媒介思想」（社会思想における個と全体の二元的-アトミズム的な対立の固定化を超える視点）ならびに、〈否定性〉と〈媒介〉という契機によって成り立つ「批判的カテゴリー」としての〈総体性〉の概念が、現在もなお、社会理論としてどれほど発見的かつ批判的に機能しうるのか、その批判的社会理論としての有効性が検証されるわけである。その意味で、IV（第9章～第12章）は、本論にとってもっとも重要な部分をなす。

諸々のヘーゲル批判を典型的に整理し、位置づける作業は、まず、バウアー、フォイエルバッハ、シュティルナーによる先鋭化された宗教批判、ならびにルーゲ、マルクスらによる政治批判におけるヘーゲル主義の批判とヘーゲル主義の急進化という二面性を読み取ることから始まり、次に、ヘーゲルを「リベラリズムの擁護者」として近代西欧の自由主義的政治理論の流れのなかに位置づけるペルチンスキーらの自由主義的解釈と、ヘーゲルの社会理論を「支配のイデオロギー」とするポパーやトピッチュラの批判的合理主義の立場からの批判とのあいだで、ヘーゲルの人倫思想がヘーゲルの思想体系そのものを内から掘り崩す可能性をもつものであることを浮き彫りにする。（とくに後者の立場からのヘーゲル弁証法の批判＝否定は、逆にヘーゲルの人倫概念の批判的機能をポジティブに培りだすことになっているという指摘は重要である。）

その上で次に試みられるホルクハイマーやアドルノらの批判理論の立場からのヘーゲル解釈の検討のなかで、本論文のモチーフが明確に結論づけられる。それは、ヘーゲルの「人倫性」概念をあくまで「批判的総体性」という視点から引き継ぐというものである。それは言い換えると、個や全体の自存的実体化を批判的に暴く（つまり「全体の諸連関による個別的なものの被媒介性の対自化」）ときに動きもすれば、逆にそれを正当化するときに動きもするこの「総体性」という概念をつねに、あらゆるものを「媒介されたもの」として提示していくその「否定的」な機能においてのみ働かせるという視点である。論者によるこの解釈は、現代のヘーゲル研究者によるヘーゲル人倫思想の解釈（とくにヘスレとトイニッセンの「人倫性」を「相互主体性」の視点から読み解くという解釈）を検討する際に、とくに鋭く働きだす。

こうして論者は、ヘーゲルの人倫思想を現代の社会理論と実践哲学のなかで批判的に継承・展開する可能性を確証するわけだが、そこに到るにはいまだ少し、補完的な作業も必要になってくると思われる。たとえば、本論文の鍵概念

の一つに「批判」(Kritik)という概念がある。言うまでもなくこの概念は古代ギリシャに起源をもち、また直接にはカントというドイツ哲学の先行者に由来するものであるが、本論文の語法は必ずしもカントのそれとは一致せず、むしろ現代的な語感で用いられている。そこで、それをもう一度歴史的コンテクストに戻して、カント的な「批判」概念との異同を詳細に分析する必要があるだろう。そうすれば、ヘーゲルから取り出した「批判的媒介」と「批判的総体性」の視点が、なぜそもそも「批判的」に機能するかの本質の議論が、より説得力をもつことになると考えられる。また同じように、本論文のなかでプラス、マイナスと二重に機能するとされる「総体性」概念と、伝統的な「全体(性)」概念との異同を哲学的に検証することで、論者がフランクフルト学派の人たちと共に提唱する「批判的総体性」の概念もさらに厚みをもってくるように思われる。しかし、これは望蜀の言であって、綿密周到なテキスト研究と明確な問題意識に貫かれた本論文のすぐれた成果を貶めるものではない。

本審査委員会は、本論文を博士(文学)の学位を授与するにふさわしいものと認定する。